「余りにも地上的なものであり、彼女は身体も精神も同様に考えている。しかし、彼女がこの段階にいる時、男友だちは彼女をプラトニスムとフィチニスムに導くことを企てる。六年経った今、彼女は次のように肯定することができる。「彼が望むすべてのもの、愛が欲求するすべてのもの、聴いたり、あるいは、読んだりすることのできるすべての知識は私の内にある。」[40]「私の行為の著者、読者、証人である男友だちのおかげで」男友だちのなかに女友だちの教育者を認識するように招く美しい表現は、エラスムスやヒーヴェスの願い求めた妻の家庭教師であるネオ・プラトニシアン的な夫に相当する。

この愛の家庭教育に関して、彼女の夫の「高い知識」の前で賞賛を隠さないペルネット・デュ・ギユエは、『完全な女性』ほど明白ではない。『韻律』において、「彼女の男友だちは彼女の教師であり、彼女が模倣しようと努める古代や近代の文学作品の傑作に彼女を導いたのは、彼であった。」とのみ述べている。彼女にとって、「貴婦人の男性に対する従順は生徒の師に対する謙虚さにすぎない。」彼女が彼女の男友だちを精神的師とみなしていることは、とりわけ、ペルネット・デュ・ギユエの好む隠喩に見られる。すなわち、夜、すなわち、闇（無知の象徴）を追い払う光（知識の象徴）であるJour（日）の隠喩である。Jour（日）は彼女の男友だちである。

「私はJournée（昼）、
あなた、男友だちはJour（日）、
私を不吉な滞在から離し、
私が全く望まない夜を愛することから逸らして下さる。
闇のなかでは不吉なもの以外、
何も見ることができない。」[41]

無知は悪徳である。そのことをペルネット・デュ・ギユエは肯定する。アントワヌ・エロエも同様である。二人とも、彼女たちの男友だちが彼女たちの中で悪徳を打ち倒し、その代わりに、知識を導き入れたことを賞賛している。女性に適用される原則は「よく愛し」「無知でない」ことである。実際、愛する女性は、無知と呼ばれることができない。彼女は彼女の男友だちが何を賞賛するか、軽蔑するか、どのようにすれば彼の激昂を鎮めることができるのか、を知っているからである。彼女は彼女の男友だちの望みを常に予見することができる。」彼女は何が彼を苛立たせるかを知っている。彼女の知識は、なによりも、男友だちを知ることにある。エロエは、フィチニアン（そして、プラトニシアン）の理論の助けを借りて、男友だちを通して、女友だちが彼女自身を知ることを説明している。M. A. スクリーチによれば、次のとおりである。

「『完全な女友だち』の愛が神の美の偶然の観相に至るか否かという問題が問われるであろう。フィシニアンの意味では、それは至らない。むしろ、神性が彼女の恋人にやってくる。この恋人が地上では、彼女の真の神となる。彼が死んでも彼女の愛情の中心が彼から神に移ることはない。生きている間、彼はより高い思いを集める。死んだ時、彼はなおも力を振るい、彼女は身振りによって愛情を表し、彼の復活を求めるであろう。もしもこれに失敗したとしても、彼女はより高いものを学ぶであろう。」[42] 彼女の恋人が神の右の座に座っていることを条件にしてのみ、彼女は神に導かれる。

エラスムスやヒーヴェスにとっては、女性の知識は結婚にその源泉を見い出し、結婚に戻っているのと同様、エロエにとって、女性の知識は愛にその源泉を見い出し、愛に戻る。女性の教養が決まるのは、男性との関係による。

宮廷生活にネオ・プラトニスムの教説を適応する世俗道徳の論説において、同じ事実が申し立てられている。世俗道徳の領域において最も大きな影響力をもった著者、バルタザール・カスティリオネは『宮廷貴婦人』において、「宮廷の貴婦人」は優雅な話題であらゆる種類の男性と優しく話ができるように、十分に教養を身につけねばならないと主張している。

「…この貴婦人が文学、音楽、絵画の知識を持ち、また、あの密やかな謙虚さと宮廷人に与えら

40）HEROET, *La Parfaicte Amye,* v. v. 477–479., p. 15.
41）P. DU GUILLET, *op. cit.* p. 82.
42）SCREECH (M.A.), "Querelle des Amyes", pp. 116–117.